【要旨】

【題名】 薬剤師の介入推進による医療的ケア児の在宅ケア改善の可能性
（医療的ケア児への在宅対応で薬局ができること）

〇黒澤 雅俊[1)], 土屋 哲之[1)], 邑瀬 誠[1)], 深津 英人[2)], 松井 洸[2)],
阿部 真也[2)], 山口 浩[2)], 野村 和彦[2)]
1）杏林堂薬局、2）ツルハホールディングス

【目的】
医療の進歩に伴い、医療的ケア児は約 2 万人いると推察されている。本研究の目的は、医療的ケア児が増える中で、自宅で医療を受ける患者家族が抱える問題を解決するため、薬剤師の介入報告を増やし、患者満足度の向上および地域医療への貢献を目指すことである。
【方法】
当薬局で中心静脈栄養を作成し、在宅訪問をおこなっている患者家族を対象に、アンケート調査を実施した。調査項目としては、①自宅で医療的ケア児をフォローするにあたって不安であること、②成長に応じて対応方法の変化の有無、③薬局や薬剤師に期待すること、④今までの対応で良かったことと悪かったことを設定した。
【結果】
アンケート結果から緊急時の対応方法が一番の不安であることが判明した。また成長に応じて自力で歩くようになったため、輸液ラインが不慮にはずれるなどの問題が起きていることがわかった。高熱が出た場合にはすぐに救急を受診するが、薬剤師にすぐに連絡とれることで安心して日常を過ごせるという声もあった。
【考察】
薬剤師は、処方箋通りに調剤するだけでなく患者家族へのフォローも重要な役割を担うことが示唆された。また、患者家族が抱える問題を解決するためには、薬剤師としての介入が重要であることがわかった。
【結論】
本研究は、医療的ケア児の増加に伴い、薬剤師が介入できる余地があることを示した。今後は、患者家族のニーズに合わせた薬剤師の介入をより推進し、患者満足度の向上および地域医療への貢献を目指すことが重要であると考えられる。

（第 16 回日本在宅薬学会学術大会 2023 年 7 月 神戸国際会議場にて発表）